

建礼門院右京大夫の詠作手法

— 表現摂取という視点から —

藏 中 さやか

## Summary

### Kenreimonin-Ukyonodaibu's Poetic Technique : From the Perspective of Representational Tracing

KURANAKA Sayaka

This paper discusses representational characteristics of Ukyonodaibu's, among her *Wakas* in *The Collection of Kenreimonin-Ukyonodaibu*, by pointing out and investigating into the representational similarity to the preceding pieces of *Waka*.

As for the *Wakas* for which it is possible to indicate the latest limit of the period when they are composed, the meaning of their position in the *Collection* is closely examined. As a result, it can be suggested that these *Wakas* are added to the volume later as the form of the *Collection* are properly arranged.

The groups of *Daiei-ka* and *Tanabata-ka* are individually analyzed so that it is clarified that each is constructed with the lucid consciousness of the orderly structure.

Many *Wakas*, whose representation is literally traced from the preceding ones, are included in the volume. The fact that the number of such pieces are much more than ever identified is an important key to re-evaluate Ukyonodaibu's reputation as a poet of her time.

## はじめに

近年『建礼門院右京大夫集』(以下、『右京大夫集』と称し、本文異同は井狩正司氏『建礼門院右京大夫集校本及び総索引』(笠間書院・1969年)に拠り、必要な場合のみ注に記す。尚、『右京大夫集』を含む全ての歌集本文は『新編国歌大観』に拠り、表記は適宜改める)の注釈書が相次いで刊行され、谷知子氏、田淵句美子氏等の研究成果とあわせ、同集への関心は一層高まっていくものと期待される。先行研究は、伝記的研究・成立論・本文研究・内容の検討等に大別されようが、詠作そのものに関する言及は、「雪のあけぼの」等の考察から集全体に新古今表現の撰取が散見することを指摘された佐藤恒雄氏の研究が成立論とも関わって現在の研究方向の先駆的位置にあり、また先行歌の表現撰取という観点からは岩波文庫版『建礼門院右京大夫集』(久松潜一氏・久保田淳氏校注)の脚注における指摘が今なお研究史の上では重要なものである。例

しかし詠作手法そのものに関する具体的論評は意外なほど少ない。例えば『新潮日本古典集成 建礼門院右京大夫集』解説(糸賀きみ江氏に拠る)は「同音同語を繰り返し畳みかける手法を頻繁に用いている」ことを挙げる他、使用する表現に着目し、「月依所明」題詠歌、

49名に高き姨捨山のかひなれや月の光のことにみゆらむ

に、永万二1166年中宮亮重家朝臣家歌合の「右京大夫 殿下女房」の作、

64名に高き姨捨山のつきかげも秋はことにぞ照りまさりける

と同表現が含まれること等から、特定の場へ出詠したことを論証する。

また田淵氏は「口から自然に詠み出されたような平明さを備え、時には理が勝ち、詞の緊張が薄く、やや素人的で、一面詞遊び的試みも見られるが、それには専門歌人の刻苦とは違う気軽な自由さが漂う」と評する。

これまで研究者のまなざしは右京大夫自身の背負う悲劇性、際立つ時代色とそれを描写、表出する集中の長文の詞書や、直截的な感情を吐露する散文的な和歌に注がれることが多く、集に対する評価も主として日記的とも言われる詞書部分に対して与えられてきた。それは、集内の和歌が新古今時代の和歌と比べて、余りに平板で口語的、新鮮味に欠ける詠みぶりに拠ることに起因しよう。しかし研究の進展した現在、今一度、『右京大夫集』そのもの、集中の和歌表現そのものに立ち戻り、その詠作手法について幾許かの分析を加える必要を感じる。

右京大夫の詠作は、和歌の修辞技巧にとられず心のうちを歌う散文的傾向をもつものと、先行歌の表現に拠りながら作歌したものとに大きく二分されよう。本稿は特に後者について取り上げ、表現の源を辿ることを通してその特性を炙りだしてみたい。後者に相当する詠を、先行研究に拠って数例掲げよう。先述の佐藤氏の指摘は、「山家初雪」題詠歌、

51春の花秋の月にもおとらぬは深山の里の雪のあけぼの

と良経の次の一首との関係を論じたものであり、新全集頭注も同じく良経歌を「類想歌」として掲出する。

210春の花秋の月にも残りける心のはては雪の夕暮(『秋篠月清集』・十題百首・天象)

佐藤氏は「これだけ酷似した歌が偶然に詠まれるものかどうか、私には良経歌から直接その発想を学んだ可能性が十分すぎるほどにあると

思われてならない」と述べる。<sup>(6)</sup>

当代歌人詠に限らず、同様の類似関係は次のような場合にもみえる。

月の夜、例の思ひ出でずもなく

171 面影を心にこめてながむればしのびがたくもすめる月かな

532 いしにへの面影をさへさしそへてしのびかたくもすめる月かな

〔散木奇歌集〕・九月

佐藤氏と新全集頭注は、俊頼の一首に加えて和泉式部の

1023 なにごとも心にこめてしのぶるをいかで涙のまづ知りぬらむ

〔続古今集〕・恋一・しのびて人にも申し侍りけるころ

をも指摘するが、この場合、「面影」という同語の使用に加え、下句の完全な一致から、俊頼詠との関係の方が注目されよう。<sup>(7)</sup> 同様の例は他にも指摘されている。「そらがくれ」する「月」を詠む

263 世の中の常なきことのためしとてそらがくれにし月にぞありけるは、先行する

415 世の中の人の心の浮き雲にそらがくれする有明の月〔詞花集〕・

常在靈鷲山のころをよめる・登蓮

に極めて類似する。<sup>(8)</sup> また先後関係は不明ながら

123 移り香もおつる涙にすがれてかたみにすべき色だにもなし

と忠盛の次の和歌とは結びつきが想定されよう。<sup>(9)</sup>

77 暮れまたむかたみにすべき移り香はかへる涙のすすぎつるかな

〔忠盛集〕／『言葉集』90三句以下「移り香をおつる涙のすすぎはてつる」

右京大夫にとって先行歌からの学びはしばしば表現をまとまりで摂取

するという形でおこなわれているという点を、我々はまず認識しなければならぬ。「類似歌」については、歌合判詞で近代、同時代歌との類似が指摘される詠作を論じた佐藤明浩氏「近頃の歌」との類似をめぐって―平安後期―鎌倉初期の意識―（『和歌史の構想』和泉書院・1990年）や、教長詠と古今集歌との関係から同時代の「句取り」の有り様を取り上げた黒田彰子氏「教長の古典摂取―句取りという詠法をめぐって―」（『愛知文教大学論叢』第3号・2000年）等で論じられている。近い時代の先行歌との表現類似は、定家『近代秀歌』によって「さらましくおもふ」ものとされ、『八雲御抄』に「ちかき人のことばを盗みとること」への言及があるもの、実際には多く存在し、またそれを容認する時代の風潮がある時期あったことは両者の論からも明らかである。

右京大夫の場合も他者詠と類似する和歌が複数存在することが指摘されてきたが、特にこの点を追及することはなされず、これまでの指摘自体も網羅的なのではない。本稿では、従来指摘されてきていない他者詠と類似する表現の指摘、検討を通して、右京大夫の表現方法をあとづけ、また付随してそれらの集内配置の検討から編纂過程にも言及したい。

尚、本稿では『新編国歌大観』（CD-ROM版<sup>Ver.2</sup>）による検索と、中村康夫氏が考案された「類歌検索」という手法とを用いた。<sup>(10)</sup> 得られた膨大なデータから、特に必要な用例のみを提示するものとする。

「はじめに」で、これまでに表現摂取が指摘されている例を示したが、

「二」では、従来指摘されてこなかった、他歌と表現上の一致度の高い和歌を掲げ、その詠作手法を確認するとともに、可能なものについては詠作年次を特定してみたい。これらは、右京大夫の表現が他者に受容されたとみることも可能であるが、「はじめに」に示した表現撰取のあり方や新古今時代には必ずしも歌人として高い評価を得ていなかったと考<sup>(1)</sup>えられる点を勘案し、右京大夫が表現を撰取したという立場でひとまず考察を進めたい。尚、論述の都合上、一首を除き、題詠歌群と七夕歌群に含まれる和歌については、「二」以降で述べる。

まず、前代歌人詠からの表現撰取がみられる詠作のうち、特に顕著な関係が指摘される場合を歌番号順に列記していくと、次のようになる。

四月ばかり、親しき人具して山里にありしころ、ほととぎすの常に鳴きしに

80 都人待つらむものをほととぎすなきふるしつるみやまへの里は、既に指摘のある通り、

6 都人待つらむものを山里に聞きふるしつるほととぎすかな（『在良集』・山家郭公）

に類似するが、稿者はこれを元にして詠まれた頼政の一首も指摘しておきたい。

150 都には待つらむものをほととぎすいづるを惜しむみやまへの里（『頼政集』・山家郭公、法住寺殿会）<sup>(12)</sup>

また、隆信との恋愛の終末期に詠まれた次の歌はこれまで『古今集』の「水の泡の消えて憂き身といひながら流れてなほも頼まるるかな」（792・題知らず・友則）との関係が指摘されてきた。

163 流れてと頼めしことも水茎のかきたえぬべきあとのかなしき

この和歌にみえる「流れてと頼めしこと」とは「流れてと頼めしことは行すゑの涙の上をいふにぞありける」（『小町集』80）に拠るものであるが、これを「水茎」と結びつける先行類歌には次のような歌がある。

103 流れてと頼めしことも水茎のあとさへ今はかきたえにけり（『待賢門院堀河集』・ふみみぬ）

94 ゆきかよふあとたえぬるか水茎の流れるとかや人のたのめし（『馬内侍集』・さらに忘れじと契りたる人に、たえてあるところをだに知らせねば）

423 かきつめしことのはのみぞ水茎の流れるとまる形見なりける（『統詞花集』・身まかりにける女のせうそこどもの侍りけるを見よめる・公通／『新古今集』・826・初句「かきとむる」）

小町歌を源にする一つの定型が成立していたと考えられ、それに依拠して一首を構成したものであろうが、錦織周一氏『待賢門院堀河集全注釈』（和泉書院・1989年）が103歌の【補遺】で指摘するように、特に待賢門院堀河詠との類似が際立っている。

また、維盛と恋仲であった友人を思い遣る気持ちから、維盛宛てに詠んだ和歌に次のような一首がある。

189 おきてゆく人の名残やをしあけの月影白し道芝の露  
新全集頭注が指摘するように「をしあけ」という語の新しさが注目されるが、上句は、次の和泉式部詠からの表現撰取を想定すべきであろう。

209 有明の月みすさびにおきてゆく人の名残をながめしものを（『金葉集』三奏本・秋・有明の月をみてよめる／『和泉式部集』・166・

あか月の月・初二句「あか月の月見すひまに」・第四句「人の名残に」

423 おきてゆく人は露にはあらねどもけさは名残の袖もかわかず

『和泉式部統集』・よのなかはかなき事など、夜一夜言ひあかして、かへりぬるつとめて

続いて同時代歌人の詠と類似する表現を含む和歌をとり上げる。

まず、慈円詠との類似に注目したい。右京大夫は文治五1189年まで慈円の僧坊で暮らしていた(『拾玉集』5145-5148)と言われ、この時期には直接的な学びの機会があったものと想定されるが、集中にはこの時期と前後して詠作された慈円詠と類似する表現を持つ和歌がある。次節でとり上げる題詠歌群中の一首、

早蕨

43 紫の塵ばかりしておのづからとところにもゆる早蕨

は、次の文治三1187年結題百首と下句が同じである。

809 むらむらにかかる霞をけぶりにてとところにもゆる早蕨

〔『拾玉集』・早蕨未遍〕

同様の例は題詠歌群中ではないが集前半の末尾近くにもある。新全集頭注が「下句の一致する歌を詠んでいるが、偶然か」として、

202 あはれてふ人もなき世にのこりゐていかなるべきわが身なるら

む

13 に対して、文治五年九月に寂蓮のもとへ無動寺から遣わした一首を掲げる。

5116 鈴虫の声もやまべにきこゆなりいかなるべきわが身なるらむ

〔『拾玉集』〕

また定家の詠との類似も指摘できる。最末部近くに、建久九1198年五月に三十一歳で亡くなった源通宗を追憶する次の一首がある。

352 おもひいづる心もげにぞつきはつる名残とどむる有明の月

直前部には「豊の明りの節会の夜、さえかへりたる有明に参られたりしけしき、優なりしを、ほどなくはかなくなられにしあはれさ、あへなくとあり、352の夜の有明、雲のけしきまで、形見なるよし人々申し出づるに」開で、353以下の三首に続く部分である。352のように、月のもと心が尽き果てるという趣向を歌うものには嘉応二1170年住吉社歌合の「社頭月」題詠

2 心なき心もなほぞつきはつる月さへすめる住吉の浜(俊成)

もあるが、同歌は、住吉浜に照る月の美しさに主眼があり、右京大夫の詠とは異なる。その点、次の定家の一首は、鐘の音という聴覚的契機による回想を詠むものの右京大夫の作に通うものがある。

2645 おもひいづる心ぞやがてつきはつる契りし空のいりあひの鐘

〔『拾遺愚草』・とほき所に行きわかれにし人に〕

両者の先後関係を立証することは難しいが、他の右京大夫の詠作手法から定家の詠を学んだと考える可能性はあろう。その場合、過去の回想を呼び起こす引き金が鐘の音から視覚的な有明の月へと転換し、「げに」を使うことでおぼろげに定家の和歌を引くことをうかがわせているとも考えられる。前後の集の記述から考えても通宗と資盛への思いを結び付ける詠作を配置する必要性から心に残っていた定家詠の表現を用いた新

たな回想詠を詠出したとも考えられるのではあるまいか。

さらに隆信詠との類似について考えてみたい。隆信が他人詠の表現を用いたことは『八雲御抄』『近き人の詞をぬすみとる事』の条に指摘があり、隆信との表現上の相関関係には慎重にならざるを得ないが、ここでは敢えて二例をとり上げてみたい。

文治期の隆信詠と類似する表現を含むのは次の一首である。

里なりし女房の、藤壺の御前の紅葉ゆかしきよし申したりしを、散りす

ぎにしかば、むすびたる紅葉をつかはす枝に書きつく

112 吹く風も枝にのどけき御代なれば散らぬ紅葉の色をこそ見れ

〔新勅撰集〕・雑一・1098

同歌は里下がりしていた女房に藤壺の御前の紅葉が散ってしまったので葉を結び付けて遣わしたときの詠で、枝に吹くのどかな風を王充『論衡』に依拠するものという読解もある。本来散り行くものである紅葉を「散らぬ」と結びつけた「散らぬ紅葉」は歌語としては新しく、『新勅撰集』では前歌に「散る紅葉」詠を対立的に配している。治承三1179年に右大臣藤原兼実の邸で催された右大臣家歌合（俊成（釈阿）判）で、基輔が26面影にとまるはかひもなかりけりこずゑに散らぬ紅葉ともがなと詠じ「梢を散らぬ紅葉ともがなといへる事おろかなる事とこそおぼえ侍れ」と評されているが、この他、

456 竜田川散らぬ紅葉の影みえて紅くぐるせぜの白浪（『正治初度百首』・秋・良経）

3403 木枯らしに散らぬ紅葉のこずゑよりわが袖ぬらす夕時雨かな（『拾玉集』・略秘贈答和歌百首）

2520 みわたせば散らぬ紅葉もうづみけり時雨はれゆく峰の梯（『壬三二集』・秋歌とて）

のように秋の情景を描写するものとして歌われている。ここで、特に指摘したいのは、文治六1190年藤原兼実の女任子（宜秋門院）入内の折の屏風和歌として詠じられた

206 常よりもどけかるべき秋なれば散らぬ紅葉の色を見るかな（九月・紅葉）

という隆信詠の存在である。のどかな秋ゆえに紅葉が散らないという、景に託して慶祝の意を述べる隆信の方法は112と一致するものである。112の詠作時点を右京大夫が中宮徳子出仕していた時点とする限りは両者の類似は偶然の一致、もしくは隆信による表現撰取と考えるしかない。しかし『右京大夫集』が往時の詠草の手控えをもとにして隔たった時点に執筆された部分を含む集である、あるいは文治六年以降、既に記されていた和歌に対して加筆し表現を改訂することがあった、と考えるならば、112は詞書の内容と現在みる和歌表現との間に時間の断層を想定しうることになり、隆信詠の影響を考えることが可能となろう。

隆信詠との類似は次の和歌にもみえる。後鳥羽天皇に再出仕することになった時（建久六1195年か九1198年か）の心中として詠まれた長文の詞書を伴う

323 今はただしひて忘るるいにしへをおもひ出でよとすめる月影は、「しひて忘れん」という表現をもつ先行歌があることが指摘されているが、下句で「おもひ出でよとすめる月影」を詠む点では次の詠と同じである。

527 もろとも契りしよはのむつごとをおもひ出でよとすめる月影  
〔隆信集〕<sup>(16)</sup>

この場合、偶然の一致ではなく隆信の恋歌からの表現撰取とみると、月を見る右京大夫の心は若きころの自身への深い懐旧の念へと結びつき、「しひて忘れ」ようとする過去に隆信との恋愛も自ずと含まれてくることになる。

以上二例は明確にしがたい面があるが、隆信詠との類似ということに拠り、問題提起として提示したい。

さらに、本集の執筆過程への言及と関連付けて一例示しておく。新全集解説は執筆過程について「歴史の展開に伴う宮廷とその周辺の推移を写し、その時々自身の心情を、元になる詠草群に付されていた心覚え的な文章を手がかりに遥かに思い起こしながら、あたかもそれが現時点のことであるかのような形でそれを吐露していったのであろう。場合によつては、その際に往時を回想するという内容の歌も新たに詠み加えられたのであろう」と述べる。これは、下巻七夕歌群までがまず書かれ再出仕した後に上巻と下巻後半部分が書かれたとし、その中でも61〜64までを「かなりの時を経て浄化された、遠い回想」とする谷知子氏の見方とも通じるものである。さらに谷氏は上巻については「和歌はその当時詠まれたものと、建保期に詠まれたものが混在しており、詞書は基本的には建保年間に書かれたもの」とする。

このような執筆過程を証する例、すなわち描く事柄よりも後に詠まれた和歌の表現を撰取した詠作として考えられる例は既に指摘されてきているが、稿者は次の例を追加したい。重盛が内大臣で左大将を兼任した

際、弟の宗盛が供となって昇進のお礼言上をした時（安元三117年ころ）の「いきほひゆゆしく見え」た際の詠57である。

同じ大臣の、大臣の大将にてよるこび申し給ひしに、おとうとの右大将、御供し給へりし、いきほひゆゆしく見えしかば

57いとどしく咲きそふ花のこずゑかなみかさの山に枝をつらねて  
この詠は「みかさの山」に「枝をつらねる」（連枝）という表現をもつ。

これは、三笠山が天皇の御笠となつてはたらく近衛府に通じることと連なる枝が兄弟を表すことによる。このような表現をもつ和歌として『長秋詠藻』の贈答歌が注目される。<sup>(17)</sup>

左少将が少将に成りて侍りしに、経家の三位許より

607日にそへて花咲く宿のこずゑかな羽の林に枝をつらねて

返し

608げにやしか花咲きまされとおもふかなみかさの山に枝はつらねつ  
この贈答は詞書から、文治五1189年十一月に定家が左少将に任じられた折の経家と俊成のやりとりであることがわかる。「羽の林」は近衛府の唐名で、既に文治元1185年より定家の兄成家が右少将であったことから、兄弟がそろつて近衛府に任官したことの慶びを言い遣つたものである。俊成の返歌は、父親として家の一層の繁栄を願う気持ちを込めたものであるが、贈歌の「羽林」を天皇の守りという意味合いを色濃く持つ「御笠山」に言い換えたところに、帝への忠誠を誓う心を現れている。

詠作年次は明らかに経家・俊成の贈答歌が後である。しかし、右京大夫の作は個人の回想詠であり平家滅亡後数年しか経ていない文治五年の時点で、経家に表現撰取されるほど広く知られていたとは考えにくく、



また何よりその和歌が上句は経家詠の、下句は俊成詠の表現を借りたような詠であることから、右京大夫が両者の贈答を学んで作歌したと考える方が妥当であろう。とすれば、57は詞書に「いきほひゆゆしく見えしかば」とあるもののその時点で詠じられたものではない。重盛、宗盛の想い出を綴る中に、在りし日の平家の「いきほひ」を彷彿とさせる情景を回想して詠んだものが含まれていることになり、57は、描く事柄とは十年以上隔たった文治五年以降に詠じられたものとなる。直後58が、安元の大火（安元元年十一月）という大災の折のものでありながら、「いづれの年やらむ」と臚化した表現で書き始められている点も、内容と執筆時の間に時間の経過があることを感じさせ、また続く59は「八島のおとどとかや、このごろ人は聞こゆめる、その人の中納言と申ししころ」という表現で始まるが、宗盛を「八島のおとど」と称することは寿永二1183年十月に屋島に行宮を造営したことに由来することを考えると、この部分の執筆も57と同様に時を経た回想に拠るものと考えられる。これらより、重盛主催の菊合における代作歌56から配される重盛、宗盛に関する想い出を描く部分は、文治五年以降に執筆されたものと想定したい。

以上、表現撰取であると断定しがたいものも含まれるが、稿者は、①右京大夫の詠は前時代、及び同時代詠からの稚拙な先行表現撰取が際立つ、②集には従来の指摘以上に、後の感慨が付加され、筆が加わっている部分が含まれている、と考える。特に、②については、記される事柄の発生した時点で詠まれた和歌が時を経過した後の感慨を伴って記される場合、過去を回想した時に過去に立ち戻って詠じた新しい和歌が書き記される場合、といった、異なる時間のもとで詠じられ、記された部分

が繋ぎあわされて最終的に完成したと考えるべき作品が本集であること、個々に独立した「時」を持つ詞書と和歌が組み合わされ、その組み合わせが連なって集の各パートが成り立っていることを再確認したい。個々の詠の中には、心に留められた先行歌の表現が回想の中で浮上し、新たに自詠としてつむぎ出されたものが含まれていると考えられる。

## 二

次に「一」でみてきたような特色を踏まえた上で、従来から議論されてきている題詠歌群と七夕歌群について考えてみたい。<sup>(19)</sup>集中の両歌群は、長い詞書を伴う和歌を中心とする同集にあつて、明らかに異質の部分である。新全集解説は題詠歌群（14～53）を「ほぼ詠作年次順にまとめられた作品群」、七夕歌群（272～322）を「明らかに部類意識が働いている」作品群とし、全体について「ある段階までは彼女にも世間一般の私家集らしい集を編む意志があつたことを物語るのではないであろうか」と述べる。現在の体裁では両歌群は集としての構成上、上下巻の対になる位置に配される。本節と次節ではやや羅列的になるが、個々の表現からみえる問題を指摘していきたい。

谷氏の指摘通り、題詠歌群は「長い時期にわたって詠んだ歌を収めたもの」であるが、佐藤氏は、題詠歌群の末尾51・53に『新古今集』の影響がみえることを根拠に、これら詠作年次が下る和歌が、集としての体裁を整える段階で含みこまれて題詠歌群が編成されたことを述べた。これに加えて次に示す歌群冒頭の一首も、本歌群の中では新しい歌と認識

すべきものであろう。

何となく詠みし歌の中に、春立つ日

14 いつしかと氷とけゆくみかほ水行く末とほき今朝の初春

題詠歌群冒頭に位置する立春を詠じる同歌は、『正治初度百首』詠で『後鳥羽院御集』巻頭歌でもある次の一首、

いつしかとかすめるそらものどかにて行く末とほし今朝の初春<sup>(20)</sup>

と酷似している。霞める空に春の到来をみる後鳥羽院歌の風情を「みかほ水」の解氷に置き換える手法である。詞書を見る限り、明確な詠作機会は不明であるが、右京大夫が後鳥羽院の『正治初度百首』における作を念頭において詠じ、題詠歌群冒頭に配置したもので、百首歌的配列を意識したものとも考えられるのではないだろうか。

以下、歌番号順に特にとり上げるべき問題点を述べていきたい。<sup>(21)</sup>

次の一首は『平安朝歌合大成』において明確な理由を示されぬまま「〔承安四年—安元二年〕」と開催年次を推定された稲荷社歌合における詠である。

稲荷社歌合 杜頭朝驚

30 まろねしてかへるあしたのしめの中に心をそむるうぐひすの声<sup>(22)</sup>

同歌の下句「心をそむる」と同じ表現を含むのは、文治三1187年成立かと考えられる西行自撰、俊成加判の『御裳濯河歌合』中の一首、

23 色つつむのべの霞の下もえて心をそむるうぐひすの声

である。また良経『秋篠月清集』の十題百首（建久二1191年）鳥部の

252 ほととぎす心をそむるひと声は袂の露にのこるなりけり

も同じ発想のもとにある。鳥の声に「心をそむる」という特異な表現に

着目すれば、この詠は承安・安元より一五年ほど下る1190年前後の作かと考えられる。

しかし同歌は「まろね」という表現を含むゆえに、新全集頭注も引く、治承二年1178八月の廿二番歌合、「長精進恋」題の因幡の詠

36 百夜まで引くしめなほにおもひしれしぢのまろねのつもる数をば  
に対する顕昭の判詞「右のしぢのまろねと云ふ事は、たしかにもみえぬことにて侍るうへにしぢのはしがきとこそ申しならはしたれ、まろねといふことは、近比ある女歌よみの詠みて侍りし後よりみなかやうにのみよまれ侍るなり」と関連付けられたり、参籠の表現と結びつけて言及されてきたりしている。<sup>(23)</sup>「しぢ」と「まろね」を結びつける例は、『散木奇歌集』の

1132 するしあれよたけのまろねをかぞふれば百夜はふしぬしぢのはし  
がき

が初出で、建春門院北面歌合、「臨期違約恋」題の俊成詠

42 思ひきやしぢのはしがきかきつめて百夜もおなじまろねせんとは  
が高く評価され、『六百番歌合』恋上678の寂蓮詠にあるように二語は組み合わせて用いられる歌語となったが、参考までに示しておく、「まろね」の女性歌人詠における例は和泉式部や赤染衛門にみえ、『六条院宣旨集』にも次のような例がある。

はじめてあふ

73 唐衣いかでかこよひ重ねまししぢのまろねにこりなましかば

下句の表現から考えれば、右京大夫詠の詠作年次は従来の推定よりも後退する。下句のみが本集成立にあたって訂されたことも否定できず、

今後、尚、検討を要しよう。

『為忠初度百首』と問題である「山田苗代」を詠む

37 山里は門田のをだの苗代にやがてかけひの水まかせつは、次の一首を念頭に置くかと新全集頭注が指摘する。

後冷泉院御時弘徽殿女御の歌合に苗代の心をよめる

75 山里の外面のをだの苗代に岩間の水をせかぬひぞなき（『金葉集』二度本・春・隆資／初度本、三奏本にもあり）

確かに両者は類似するが、右京大夫は直接的には為忠初度百首歌を踏まえた家隆の

115 山里はまがきのをだの苗代にかけひの水をまかせてぞみる（『壬

二集』後度百首・春）

に依拠して詠作したのではなからうか。

「名所のすみれ」を、「ならび」と「ひとり」の対意識で詠じた

39 おぼつかかならびのをかの名のみしてひとりすみれの花ぞ露けき中の「ひとりすみれ」は、次の『堀河百首』中の仲実歌、

247 雲雀あがるとぶひの原に我ひとり野面にさける葦をぞ摘む

が元になって『為忠初度百首』「古砌葦葉」題詠に継承され、『千五百番歌合』春四では小侍従によって次のように詠まれている。

526 いそのかみふるのの里をきて見ればひとりすみれの花さきにけり

「名所」の選択は『堀河百首』等先行歌の世界をふまえたものであろう。

43 「早蕨」題詠と慈円百首歌との類似は「一」に既述した通りである。

題詠歌群にありながら、題を脱落していると考えられる一首、

45 ともぶねもこぎはなれゆく声すなり霞ふきとけ余呉の浦風

は、既に指摘される通り『綺語抄』『奥儀抄』『古来風体抄』にもみえる

60 かへる雁くもぢにまどふ声すなり霞ふきとけこのめはる風（『後

撰集』・読人しらず・かへる雁を聞きて）

の表現を置換した歌である。霞にまどう雁から舟への発想転換をはかったものだが、この「霞ふきとけ風」の受容例は新古今時代にみえる。

例を挙げると、建仁元1201年に後鳥羽が主催した十首和歌における

3 雲をだにそれかともみむよしの霞ふきとけ春の山風（顕兼・

霞隔山雲）

や、『紫禁集』（順徳院）に「同比（建暦二1212年）当座、春夕」という詞書でみえる

133 都人かへる山ぢはまよらん霞ふきとけ岑の松風

建保三1215年九月十三日の『内大臣家百首』における定家の

1104 かざすてふ浪もてゆへる山やそれ霞ふきとけ須磨の浦風（『拾遺

愚草』・海霞）

建保六1218年ごろ下命された道助法親王五十首の「橋辺霞」題に対する

59 はし姫のまつらん方もへだつらし霞ふきとけ宇治のかは風（法橋

覚寛）

のように、顕兼以降、用いられていることがわかる。同表現は右京大夫自身が『後撰集』から見出し用いた表現というよりは、先行するいずれかの歌から学び取ったものと考えざるべきであり、詠作時点もこの表現が流行した時期と限定できるのではなからうか。

また高松宮歌合の詠である「雨中草花」<sup>(24)</sup>題に対する

48 過ぎてゆく人はつらしな花すすき招くま袖に雨はふりきて

は、堀河百首「薄」題に対する永縁の次の和歌に拠る。

637花すすき招くま袖とおぼえつつ秋は野路こそゆかれざりけれ

以上、題詠歌群においては習作的傾向が看取され、指摘したように、源平の争乱以降、新古今前後の傾向を含む表現も存在する。詠作機会ごとにとまとまった手元の詠草を元に編まれた部分とされてきたが、厳密な年次順配列がなされたかどうかは疑問である。特に14を飾るべき巻頭にあえて配置していることは早春からはじめようとする配列意識が働いたと思われる。37、39、43、48で百首歌からの表現撰取を考えたが、既に指摘されている先行表現例の中にも百首歌がその典拠として掲げられている場合が見受けられ、詠作にあたって、先行する類似の題詠歌を参考にしていたことがうかがえる。七夕歌が五一首から成ることを考えると、この部分も、別個に詠じられた歌を集成して「春十五首」もしくは「百首」といった定数歌形態に整えたかかったものが未定稿のままとなったという可能性も、あるいは考えるべきかもしれない。

### 三

続いて後半に位置する七夕という特定テーマを持つ歌群(271〜321)についても検討してみよう。この歌群は、後藤氏が十年ほどの詠草を「年々単位で年次を追って配列」したものと見方を提示したが、集全体が最終的に手を入れ整えられたものと考えられている現在、この歌群もまた、資盛没前後の「年々」の歌を、年次順という拘束なく和歌の主旨に重点を置き意図的に配列したものとという視点から再検討しておきたい。

七夕歌群中の先行表現との顕著な類似を新全集頭注の指摘に拠って、一例、示す。

306彦星のおもふ心は夜深くていかにあけぬる天の戸ならむ

216夏の夜の月の光はさしながらいかにあけぬる天の戸ならむ(『千

載集』・夏・成仲)

本節では、既に指摘のあるものとの重複を避け、幾つか新たな影響関係を考えてみたいが、七夕歌は定型的な表現に縛られ、類型化は避けがたい面もある。例えば、

292七夕のあかぬ別れの涙にや雲の衣の露かさぬらむ

にみえる「七夕のあかぬ別れ」、もしくはその類似表現は

其庚申の夜は七月七日なりけり、七夕の心

74彦星のあかぬ別れの涙ゆゑ天の川浪たちやそふらむ(『安法法師

集』)

をはじめとして、

165七夕のあかぬ別れの涙にや花のかづらも露けかるらむ(『金葉集』

二度本・師時)

761七夕のあかぬ名残の涙にや雲の衣もしをれはつらむ(『後鳥羽院

御集』)

や『拾遺愚草』437・『千五百番歌合』1155等にみえ、特定の先行歌を指摘することは難しい。<sup>(26)</sup>しかし、中には特定の先行歌を指摘しうる場合がある。例えば、上句と下句を別個の和歌から取り出し一首に合成したかのような表現がある。

304ながむれば心もつきて星合の空にみちぬるわがおもひかな

この歌は、従来、次の歌の影響が指摘されてきた。

378 君にのみあはまくほしの夕されば空にみちぬるわが心かな〔古今六帖〕・一・ほし)

488 わがこひはむなしき空にみちぬらしおもひやれどもゆく方もなし〔古今集〕・恋一・読人しらず)

しかし、上句の趣向は文治六1190年三月『俊成五社百首』にみえる

430 ながむれば心もつきぬゆく虫まどしづかなる夕暮の空(日吉百首・虫)

や『千五百番歌合』の

1581 ながむれば空に心ぞつきぬべき秋に知られぬ夕暮もがな(秋四・忠良)<sup>(27)</sup>

と同様と言うべきであろう。また

301 曇るさへうれしかるらむ彦星の心のうちをおもひこそやれ

は、既に指摘されるように、上句は

722 いつしかと暮れを待つ間の大空は曇るさへこそうれしかりけれ〔拾遺集〕・恋一・題知らず・読人しらず)

に拠る。類型的な表現である下句は

633 身をつめばしたやすからぬ水鳥の心のうちをおもひこそやれ〔散木奇歌集〕・大殿歌絵に、女のおもひをもちてゐたるに水鳥

のまへにあるところを)

にもみえるが、七夕という趣向の点からは

撰政左大臣家にて七夕の心をよめる

42 彦星のたぎつの波に舟出する心のうちをおもひこそやれ〔金葉

集〕二度本解題・藤原時正／『金葉集』初度本・237・藤原時昌・

第二句「うきつのなみに」)

の影響を考えるべきであろう。

312 おもふことかけどつきせぬかぢの葉にけふにあひぬるゆゑを知らばや

の場合は、新全集頭注の指摘する

242 天の川とわたる舟のかぢの葉におもふことをもかきつくるかな〔後拾遺集〕・秋上・上総乳母)

よりも、上句の「書いても尽きることのない思い」という趣向から

43 たなばたの天の戸わたるかぢの葉におもふことこそかけどつきせね〔金葉集〕二度本解題・(七夕の心をよめる)・一宮小弁)

に拠るものであろう。

右の二首は、『金葉集』二度本の橋本公夏本にみえる和歌と表現が一致するものであるが、次のように、新全集頭注指摘中にも濃厚に『金葉集』の影響がみられる和歌は含まれている。

290 いとふらむ心も知らず七夕に涙の袖をひとなみにかす

この詠は、左の能因詠の「苔の衣」を「涙の袖」に置き換えたところにその発想の源がある。<sup>(28)</sup>

159 七夕の苔の衣をいとはずはひとなみなみにかしもしてまし〔金葉集〕二度本・秋・能因／『金葉集』初度本・236／『金葉集』三奏

本152・結句「とひもしてまし」)

以上三首はいずれも初撰・二度本系『金葉集』秋部に非常に類似した表現が見出せる。七夕歌群は長年にわたる詠を繋いだものという考え方

が示されていたが、七夕というテーマに対する同一詠作機会に同一歌集からの表現撰取が為されたと仮定すると、同一時にまとまって詠作されたものが七夕歌という分類の中でばらばらに配されたもの、という考え方も成り立つ。

この他、先に述べた292に加え、三奏本を含む『金葉集』のいずれかの系統に含まれる歌に類似する表現がみられるのは次の三例である。<sup>(29)</sup>

274 契りけるゆゑは知らねどたなばたの年に一夜ぞなほもどかしき<sup>(30)</sup>

161 契りけむほどは知らねどたなばたのたえせぬ今日の天のかはかせ

〔金葉集〕三奏本／続詞花・155／新古今・1985／続古今・1565等

302 よひのまにいりにし月の影までもあかぬころやふかきたなばた

692 よひのまにほのかに人をみか月のあかでいりにし影ぞこひしき

〔金葉集〕二度本・異本歌・為忠／後葉・354／続詞花・598

310 世の中は見しにもあらずなりぬるに面変わりせぬほしあひの空

585 むかしにもあらず姿になりゆけどなげきのみこそ面変わりせね

〔金葉集〕二度本・雅光／『金葉集』三奏本・575

素直に詠出されたようにみえる七夕歌群にも先行歌からの表現撰取が存在する。五一首という形に整備しているこの歌群においては詠作年次のままに和歌を並べたと考えるよりも詠じ置いた和歌の中から適当なものを選り出して配列したというほうが適当であり、長年の思いを効果的に表現するためにおこなった意図的な配列を想定すべきであろう。

以上、本節並びに前節では二つの歌群に含まれる和歌に類似する表現を持つ他者詠を具体的に提示した。双方の歌群を集の中で一対となるように配するという編纂意識に基づく構成を本集がとっていると考えるな

らば、その配列においても、同様の手法がとられたことが考えられよう。題詠歌群には詠作年次の下る作が含まれていること、七夕歌群の中には同一歌集の表現を濃厚に踏襲する和歌が分散して配されていること等から、両歌群は単純な年次順配列ではなく、それぞれにそれなりの編纂意識をもって構成を目論まれたものであることが証されよう。

#### 四

最後に本節では物語歌からの影響について考えてみたい。右京大夫が『伊勢物語』や『源氏物語』に親近した歌人であったことは度々論じられてきたことであり、特に右京大夫が自身を浮舟になぞらえていることは作中の表現からうかがえるところである。<sup>(31)</sup>

新たに『源氏物語』との関係を指摘したいのは左の一首である。

いたく心ほそき旅のすまひに、友待つ雪消えやらでかつがつままざる空  
をながめつつ

254 さらでだにふりにしことのかなしきに雪かきくらす空もながめ<sup>(32)</sup>  
この一首は雪の残る旅中の宿りで「あまざる空」をながめ、哀しい回想にひたる場面である。雪が回想の引き金になっていることがわかるが、「ふりにしことのかなし」さは具体的には語られない。過去の辛い経験に旅の心細さが加わった心情を「雪かきくらす空」が象徴的に表現する。

詞書「友待つ雪」は歌語として用いられる他、『源氏物語』若菜上巻に「友待つ雪のほかに残れる上に、うち散りそふ空をながめ給へり」<sup>(33)</sup>とある。しかし同語は右京大夫がわが身をなぞらえた浮舟の関わる場面

でも見出せる。浮舟巻で句宮が浮舟を訪問することを決意した折の京の光景を描写する場面には「京には、友待つばかり消え残りたる雪、山深く入るままに、やや降りうづみたり」とある。そしてその句宮の訪問後の浮舟を語る手習巻には、次のような場面があり、その和歌は右京大夫の和歌に類似している。

……「君にぞまどふ」とのたまひし人は、心憂しと思ひはてにたれど、なほその折のことは忘れず、

かきくらすのやまの雪をながめてもふりにしことぞけふもかなしき(789・浮舟)

など、例の、慰めの手習を、行ひの隙にはしたまふ。

雪の降り積もる中、句宮が訪れてきたことを回想する場面で「ふりにしこと」はかつての二人の逢瀬である。かきくらす野山の雪を眺めることとは思い出を呼び起こす。

右京大夫の心の中に雪の中の資盛の訪問というシーンが深く刻まれていることは114にあり、それが『源氏物語』浮舟巻の描写と重ねあわせられていることは既に谷知子氏が指摘しているが、和歌表現の類似からこの場面もやはりその一連の思考の中に捉えられるのではないだろうか。手習巻での浮舟の詠は春のしるしもみえない小野の山里にあって過去を回想するという場面であった。旅中の不安を感じつつ心が回想に向かう時、浮舟に自身の姿を重ねるといふ流れを想像すれば、一首は「(あの浮舟の詠んだ歌のように) そうでなくてさえ過去は哀しいものなのに。(浮舟のみたような) かきくらす空もながめまい」という解釈になり、「ふりにしこと」とは資盛との恋愛の顛末を含んだものと理解され、浮舟の

みたような空を見るまいと歌うことには、追憶の哀しみに陥ることに抗う作者の意志が感じられる。114・247・248にみるように「雪」は右京大夫が資盛を回想する際の重要な鍵であった。谷氏は平家文化圏における源氏物語受容を「個人的な体験に寄り添うかたちで、『源氏物語』を読み、撰取してゆく<sup>34)</sup>」と述べる。この部分も、そのような例として考えられるのではないだろうか。

以上、物語歌からの表現撰取という観点から一首をとりあげ、わが身を浮舟になぞらえる例として解釈し得ることを提示した。

## おわりに

新全集解説に示された『明月記』建永元1206年七月一二日の記事は、「古今歌風といささか趣を異にする歌体を「咲う」(嘲弄する)」ことを目的にした歌合に右京大夫が出詠したことを示すものであった。これをもとに田淵氏も右京大夫が後鳥羽院歌壇で低い評価をうけた、という点を重ねて指摘している。

本稿では、散文的な思いのほとばしりを詠んだ

212あはれさればこれはまことかなをもただ夢にやあらむとこそおほ

ゆれ

のように口語的な表現がそのまま和歌になった場合や、既に指摘される特徴である繰り返し表現を用いる場合を除き、類似歌を見出すことのできる詠作の存在に注目してきた。表現を撰取する和歌として和泉式部の詠や『金葉集』入集歌、当代詠を指摘し得たが、先行研究の成果を加え

ても、右京大夫の歌ことばの源泉が三代集時代の表現であるとは言えない。右京大夫は古き「詞」を用いて新しい「心」を創り出すようなことはしない。「愛唱」の結果であろうか、ただ心に残った先行歌の一節をそのまま自作に詠み込んでしまうのである。先行歌から得た語の組み合わせによって新境地を描出するのではなく、複数句というまとまった単位で表現を撰取し、場合によっては、二首の先行歌の上句と下句を組み合わせるのである。この事実は、先学によって「偶然か」というような控えめな表現で断片的に指摘されてきていたが、稿者はこれは作者独自の詠法パターンであったと積極的に認識したい。例えば女性歌人として評価を得た二条院讃岐の方法とは異質のものを感ずるのである。<sup>(35)</sup>

注意を要するのは、集中にみえる次のような例から、このような手法が右京大夫の周辺では、ままおこなわれたものなのであろうと推察されることである。次の346・349は親長の作である。

346 くちなしの花色衣ぬぎかへて藤の袂になるぞかなしき

327 をしみかね花色衣ぬぎかへてけさより風のたつをまつかな

〔堀河百首〕・仲実・更衣

135 つきくさの花色衣ぬぎかへてひとへにならむことはいくかぞ

〔出観集〕・更衣漸近

349 名にしおふ夜を長月の十日あまり君みよとてや月もさやけき

496 名に立てるこや長月の十日あまりみよとも月のくまなから

む〔林葉集〕・又、あるところにて

636 長月の十日あまりのみかの原河浪きよくやどる月影〔壬二

集〕・光明峰寺百首・河月

歌人としての力量が問われるような場ではなく、私的なやりとりではあるものの、右京大夫周辺に、表現撰取を寛大に楽しむ傾向があったことは否定できない。<sup>(36)</sup> 院政期から新古今時代に至る間の表現撰取や本歌取りを取り上げる論考には、山田洋嗣氏「院政期の類同詠に関する諸問題―「歌めく」詠と「めづらしき」詠との間をめぐる―」（『和歌文学論集7 歌論の展開』風間書房・1995年）、佐藤明浩氏「藤原家隆」（『新古今和歌集を学ぶ人のために』世界思想社・1996年）等がある。今後、これらに加え、清輔判詞の方向性を捉える中村文氏「清輔の歌評態度―仁安二年経盛家歌合の判詞をめぐる―」（『講座平安文学論究』第十五輯風間書房・2001年）、定家歌論を読み解く浅田徹氏「近代秀歌と詠歌大概―「歌論書とは何か―」（同上）等の論も参考に、右京大夫の詠法を和歌史上に定位してみたい。

本稿は、従来の論とは異なる観点にこだわる余り、表現の例示に終始した感もあるが、結果的には、なぜ右京大夫の和歌は評価されなかったのか、という点に繋がるものである。本位田重美氏が「新古今時代の絢爛たる詠風には比すべくもなかつた」と述べたように、右京大夫は新古今時代に生きながら新古今歌風に到達しえなかつた歌人である。今日の同集への評価は、個々の和歌に与えられたものではない。詠作を纏綿と綴り集めたものに対して、或いは和歌と和歌を結んでいく詞書に重点を置いた集総体そのものもつ文学性に対して与えられたものであることを追認し、本稿を終える。



## 注

- (1) 『新編日本古典文学全集47建礼門院右京大夫集』とはすがたり(小学館・1999年・久保田淳氏校注・訳)(以下、新全集と称する)、和歌文学大系『式子内親王集・俊成卿女集・建礼門院右京大夫集・艶詞』(明治書院・2001年・谷知子氏他著)(以下、和歌大系と称する)、『中世日記紀行文学全評釈集成第一巻 建礼門院右京大夫集』(勉誠出版・2004年・辻勝美氏・野沢拓夫氏著)。
- (2) 谷知子氏『中世和歌とその時代』(笠間書院・2004年)、田淵句美子氏『建礼門院右京大夫試論』(『明月記研究』第4号・2004年)。以下、両氏の説は特に注するもの以外これに拠る。
- (3) 「建礼門院右京大夫集の成立―新古今集からの影響歌を起点として―」(『言語と文芸』第87号・1979年)。以下、佐藤氏の説はすべてこれに拠る。
- (4) 今関敏子氏『中世女流日記文学論考』(和泉書院・1987年)、渡辺静子氏『中世日記文学論序説』(新典社・1989年)、『女流日記文学講座第六巻建礼門院右京大夫集・うたたね・竹むきが記』(勉誠社・1990年)等参照。
- (5) 田淵氏も糸賀氏の指摘に従い、重家歌合出詠歌人の可能性があると看做すが、賛同しない立場の論もある。尚、類似の表現は288「名に高き姨捨山も見しかどもこよひばかりの月はなかりき」(『詞花集』)429「月をみてあかぬ心は名に高き姨捨山のかげぞゆかしき」(『風情集』)にもみえる。
- (6) 佐藤論文は51の他、80「たちばなの」、53「山里の」、322「いまぞしる」、119詞書「しられずしらぬ」、230詞書「よられたる」、171「霜さゆる」について言及する。また61、64、114、116、164、165、199は後年の作であるという指摘が新全集頭注、谷著書等にみえる。
- (7) 久保田淳氏は「建礼門院右京大夫集評釈・一五」(『国文学』第15巻2号・1970年)では「散木奇歌集には右京大夫も接した筈であるからその影響かもしれないが、下句が全く一致するものも不審である。或いは私詠なので、同類にあまり頓着しなかったものか」と述べる。
- (8) 和歌大系脚注に指摘。
- (9) 和歌大系脚注、谷知子氏『「建礼門院右京大夫集」の性愛―「雪」「朝顔」「枕」「移り香」』(『国文学』第70巻3号・2005年)に指摘。
- (10) 中村康夫先生には「パソコンを使って日本古典文学を研究する会」の場
- (11) 新全集解説参照。
- (12) 頼政は右京大夫も関わりが考えられる歌林苑歌会での詠作が確認される歌人である。
- (13) 佐藤論文は1613「鈴鹿山うきよをよそにふりすていかになり行くわが身なるらむ」(『新古今集』・西行)を指摘する。この他、慈円詠からの影響が考えられるのは17「はやにはへ心をわけてよもすがら月をみるにも花をしぞ思ふ」で、初句「はやにほへ」は「花月百首」1305の初句と一致、「心をわけて」は『六百番歌合』322にみえる。
- (14) 本位田重美氏『評註建礼門院右京大夫集全釈(改訂版)』(武蔵野書院・1950年)、中原万里氏『建礼門院右京大夫集』研究―勅撰和歌集が求めたもの―(『広島女学院大学国語国文学誌』第33号・2003年)等。
- (15) 新全集頭注に569「わびぬればしひて忘れんと思へども夢といふ物ぞ人のめなる」(『古今集』・興風)を指摘する(但し同歌は『詞花集』に「読んしらず」で類歌が入集)。
- (16) 『隆信集』内で重出、小異がある。756「後法性寺殿にて、つきを見て恋をますといへる心を」/80「同右大臣家にて人人に月十首よませたまひしに、月を見て恋をますといふ事を」結句「すめるつきかな」。同歌は『言葉集』128にも「右大臣家歌合、見月増恋心」の詞書で入集。尚、『言葉集』27「見月増思と云ふ題」による行家の詠も同じ折のものか。
- (17) 和歌大系『長秋詠藻』(川村晃生氏校注)の脚注には右京大夫詠を掲出。
- (18) 本文中で触れ得なかった類想関係にある和歌のうち、特に注目されるものは次の通り。203「雲の上に行く末とほくみし月の光消えぬと聞くぞかなしき」と64「けふ見ばや行く末とほき雲の上にしはじむらむ豊のひかげを」(『周防内侍集』)、199「あまの原行末遠き雲の上にもどけき君が御代かな」(『正治初度百首』・祝・讃岐)。
- (19) 題詠歌群に関する先行研究には後藤重郎氏「建礼門院右京大夫集題詠歌群に関する一考察」(『名古屋大学文学部研究論集』第19号・1972年)、芝尾仁氏「建礼門院右京大夫集の題詠歌群試論―収集の方法と配列の意図について―」(『中世文学』第25号・1980年)、青木真知子氏「建礼門院右京大夫集と

でご教示をいただいた。紙面を借りて御礼申し上げます。

稻荷社歌合」(『星陵論苑』第11号・1989年)等、七夕歌群に関する先行研究には後藤重郎氏「建礼門院右京大夫集七夕歌に関する一考察」(『名古屋大学文学部研究論集』第18号・1971年)等がある。

(20) 和歌大系『後鳥羽院御集』(寺島恒世氏校注)の脚注には右京大夫詠を掲出。

(21) 歌題と和歌という観点からみた個々の題詠歌の詠法については稿を改めて考えてみたい。例えば、31「松間夕花」題詠は、一部が『金葉集』二度本・春・29(初度本、三奏本にもあり)の忠通詠と一致し、他者同題詠が確認できる。また崇徳院、季家に「松間紅葉」題詠があり、歌題の「松間」を「松の絶え間」と表現する例は、『風情集』・394、「顕輔集」・138にみえる。

(22) 第四句目の異文には「心をとむる」(吉・内・刊)があるが、「心をとむる」と「こゑ」を詠む先行歌を検索すると該当例はなかった。

(23) 前掲(19)青木氏同論文。

(24) 『平安朝歌合大成』三九八、中村文氏『後白河院時代歌人伝の研究』(笠間書院・2005年)参照。

(25) 前掲(19)の芝尾論文が33、45の歌題を「堀川院百首春題に私淑か」と指摘することと呼応するものと考ええる。尚、類似表現については、26「さらにあらためて」が『山家集』・1418、27「かたなびき」が公通卿家会歌や慈円詠にみえる等、本文に触れた以外にも存在する。

(26) 同様に類型的表現を例示すると296「あはれともかつはみよとて七夕に涙さながらぬぎてかしのる」の「ぬぎてかしのる」は94「たなばたにぬぎてかしのるからころもいとど涙にそでやぬるらむ」(『拾遺抄』秋・貫之)からの表現撰取で、『続詞花集』・85、『兼盛集』・164、『拾玉集』・5719にもみえる。類型的表現の中には、279「よよふともたえむものは七夕にあさひく糸の長さ契りは」のように、362「としを経てあさひく糸は七夕のたえぬ契りのしなりけり」(『林葉集』)333「七夕はあさひくいとのかにたえぬ契りをつむり結びそめけむ」(『教長集』)425「七夕はあさひく糸のよよを経てたえぬ契りかくるなりけり」(『風情集』)474「七夕のたえぬ契りはよよを経てあさひく糸にかくるなりけり」(『同集』)といった歌林苑歌人の作と表現の一致する和歌もある。

(27) 判詞には「上の句ことなる事なくきこえ侍れど」とある。

(28) 新大系『金葉集』159脚注は僧衣を不吉なものとみるのは「七夕に衣もぬぎて貸すべきにゆゆしとや見む墨染めの袖(詞花・花山院)」に拠るとする。『拾遺集』雑秋・1087「世をうみてわがかす糸はたなばたの涙の玉のをとやなるらん」(題知らず・読人しらす)の例はあるが、衣を貸す先行例はない。

(29) この他、同歌群中には新古今時代に多用された「もののおもふ袖」の「露」を詠む作307「七夕のあひみる宵の秋風にものおもふ袖の露はらはなむ」があるが、同表現は既に412「しのぶれば涙ぞしるきくれなぬにものおもふ袖はそむべかりけり」(『金葉集』三奏本)にみえる。

(30) 昭和美術館本は初句「ちきりけん」。

(31) 樋口芳麻呂氏「隆信と右京大夫の恋」(『国語国文学報』第30号・1976年)、家永香織氏「建礼門院右京大夫集」試論―二つの恋をめぐって―(『国語と国文学』第72巻第3号・1995年)、遠田昭良氏「建礼門院右京大夫の源氏物語受容」(『比較文化論叢』第1号・1998年)、谷知子氏著書及び「建礼門院右京大夫集」と『源氏物語』(フェリス女学院大学編『源氏物語の魅力を探る』翰林書房・2002年)、拙稿「建礼門院右京大夫と隆信の「むさしあぶみ」―『伊勢物語』歌詞の展開―」(『日本文芸論叢』和泉書院・2003年)等。

(32) 『新編国歌大観』では結句を「ながめし」とするが「ながめじ」と改めた。

(33) 『中世日記紀行文学全評釈集成第一巻 建礼門院右京大夫集』にも指摘がある。

(34) 前掲(31)谷氏同論文。

(35) 長澤さち子氏「正治初度百首における二条院讃岐の歌―本歌取りと当代歌撰取をめぐって―」(『古典論叢』第25号・1995年)等、参照。

(36) 右京大夫自身の替え歌的詠作は335「暗き雨の窓うつ音にねざめして人のおもひをおもひこそやれ」と1098「ふるさとの板間のかぜにねざめして谷の嵐をおもひこそやれ」(『千載集』・雑中・定頼)の間に指摘できる。このような詠法については福田智子・南里一郎・竹田正幸各氏「名歌の横顔―古典和歌再読」(『古典学の再構築』第8号・2000年)、「古典和歌データの増補とその活用」(『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』<sup>02</sup>「情報処理学会」参照)。

(原稿受理二〇〇五年九月二日)